



酒井邦嘉

(さかいくによし)さん

一九六四年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。米ハーバード大学医学部リサーチフェロー、米マサチューセッツ工科大学(MIT)言語・哲学科訪問研究員を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科助教授。著書に「心にとむ認知脳科学」(岩波書店)。本書「言語の脳科学」で第五六回毎日出版文化賞受賞。



「脳はどのようにして話を生み出すか」
『言語の脳科学』
中公新書

三四〇ページ
九〇〇円(税別)

取材・文＝大野綾／写真＝羽切利夫

脳科学の分野から言語をとらえる

机

「言語と脳科学」の著者、酒井邦嘉さんを、大学の研究室に訪ねた。

人はどうして言葉を話せるのか、母語はなぜ、自然に話せるようになるのか。こうした言語についての疑問に対して「人間に特有な言語能力は、脳の生得的な性質に由来する」として、言語学の立場から研究を展開するチョムスキー。一方、酒井さんは「認知脳科学」という理科系の分野から、言語の謎を検証する試みを続けている。研究に用いられるのは脳の活動変化を画像で見ることのできるMRIや、光トポグラフィといった装置である。

科学の世界では、仮説を立てても証明できなければ、それはただの空想で終わってしまう。よくいわれる「日本人は虫の声を右脳で聞く」という話には、「科学的にはまったく根拠のないものです。なぜなら、少なくともそれがいわれはじめた時には、今のように脳の働きを観察できるような機械がなかったですから」と酒井さん。明快である。

言語の研究に対する認知脳科学の試みをさまざまな方面から紹介する本書では、「言語は心の一部である」ととらえ、「脳の働きの一部分が心だとすれば、言語は科学の対象である」と、言語研究に対する科学的アプローチの理由を説明して

いる。

MRIを使った最近の研究で、酒井さんは、文法を使用したときに特異的に働く脳の場所があることを突き止めた。それは、大脳の前頭葉の左側、通常ブローカ野と呼ばれる部分にあるという。また、もう一つの実験では、脳の中で、単語の記憶にかかわる部分と文法をつかさどる部分が別々に存在していることもわかった。認知脳科学は、着実に言語にかかわるさまざまな謎を解明しつつある。

それでもまだ、言語は謎に満ちている。「臨界期」や「化石化」といった外国語を学習する際に出てくる現象についても、科学的な検証はこれからである。

「この研究をやっている私自身よかったことは、外国語がうまく話せないのは、脳科学から考えれば当たり前のことだと認識できたことです」と酒井さん。「母語でない言葉を大きくなってから身に付けるというのは、大変なことです。だから、人よりもたくさん時間をかける必要がある。どの程度の目標で、またどんな方法で身に付けるかというのは人によって異なると思いますが、自分の目的に合わせて、少し高い山に登るのかな、と思えば楽になります」と心強いひと言。

酒井さん自身は、現在、もう一つの日本語、日本語勉強中だそうである。上達具合を尋ねると、「ぼちぼちです」と笑った。